

ちえの森 ちづ図書館

記録冊子

ちづのきおく

はじまりのものがたり



はじめに

2020年11月29日、智頭町に新しい図書館が開館しました。

「ちえの森ちづ図書館」と名付けられたこの図書館は、

2014年に設置した図書館づくり検討委員会での話し合いや

2017年から3年間にわたり開催した住民ワークショップ、

小中高校での子どもたちの語り合いなど多くの町民の声からできた図書館です。

1973年竣工の智頭町中央公民館図書室を名称変更した智頭図書館は、

老朽化が進みバリアフリーではないなど、

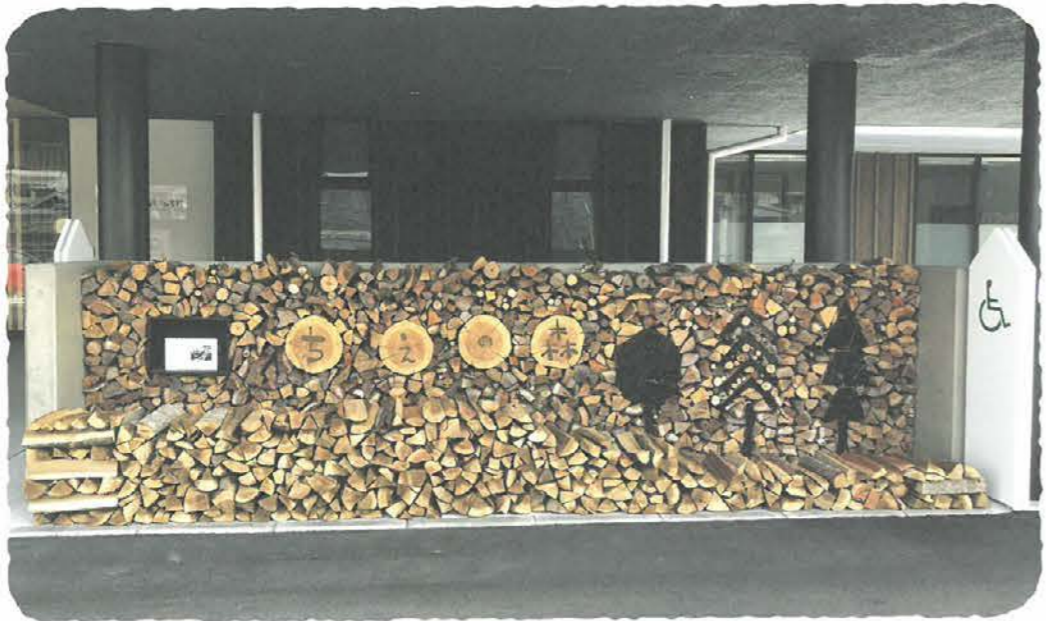
誰でも気軽に利用できる状況ではありませんでした。

その環境整備について始められた検討でしたが、

いまでは「みんなで考える私たちの新しい図書館」として、

開館後にもつながっています。

この冊子を通し、みなさんにその図書館ストーリーをお届けできればと思います。



住民ワークショップで制作した薪アート

目次

はじめに

ちづ図書館整備のあゆみ

ちえの森ちづ図書館
ついに開館！

智頭図書館を考える会
インタビュー

住民ワークショップ
メンバーインタビュー

中学生メンバーへの
インタビューと活動の記録

智頭中学校
新図書館プロジェクトのあゆみ

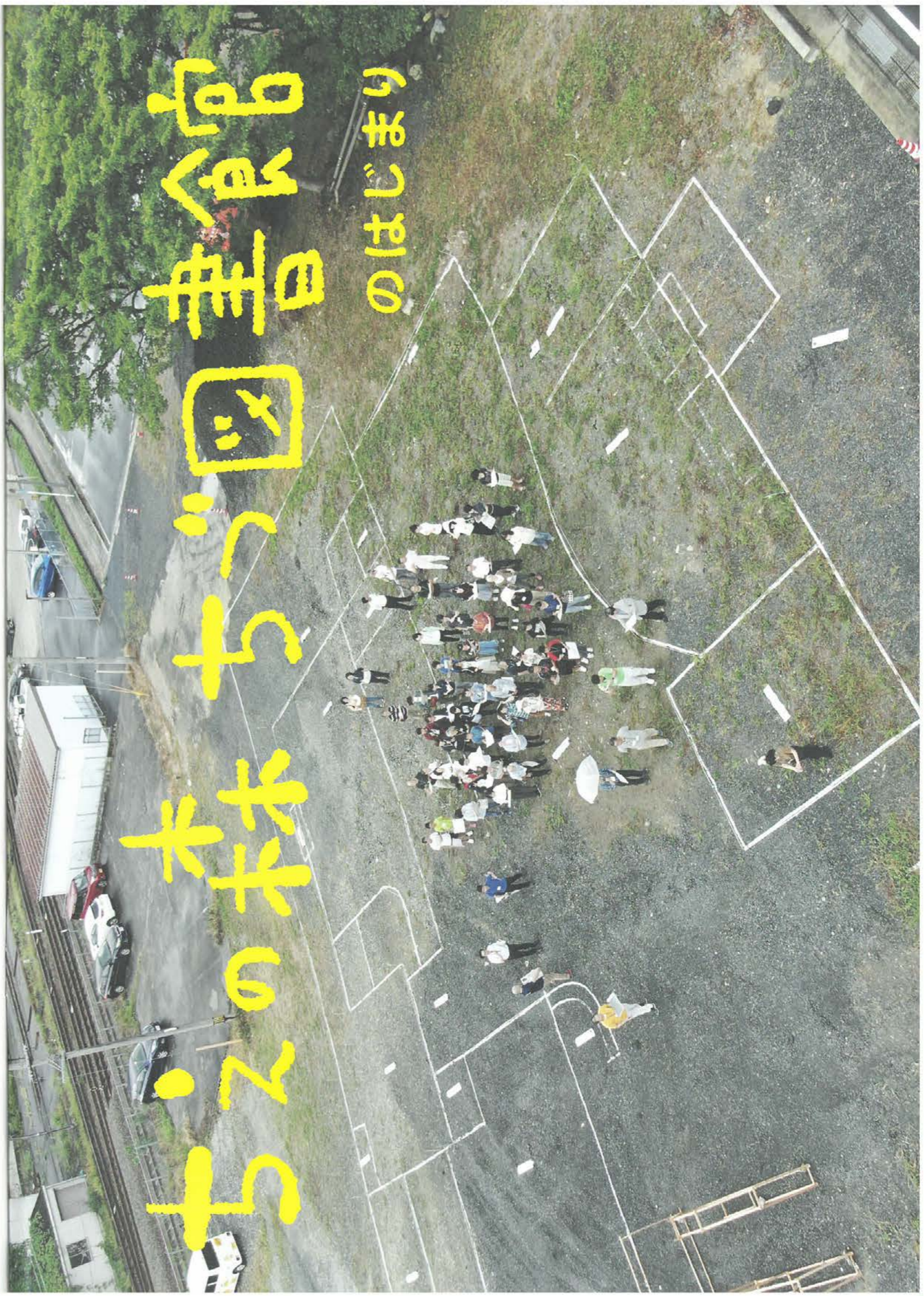
みんなで考える
「私たちの新しい図書館」
住民ワークショップのプロセス

「建築の紹介」
徳岡設計インタビュー

「ロゴサインの紹介」
村岡姉妹インタビュー



ちづ図書館の始まり



ちづ図書館 整備の あゆみ

2014年4月・智頭町図書館づくり検討委員会設置

2015年10月・智頭町図書館づくり検討委員会「意見書」教育委員会へ提出

10月・新図書館整備検討庁舎内プロジェクトチーム発足

2017年8月・第1回住民ワークショップ

10月・智頭町立智頭図書館整備基本構想(案)パブリックコメント実施

12月・第2回住民ワークショップ

12月・智頭町立智頭図書館整備基本構想策定

2018年2月・智頭町立智頭図書館整備基本計画(案)パブリックコメント実施

3月・智頭町立智頭図書館整備基本計画策定

5月・新図書館設計業務公募型 プロポーザル公告

6月・1次審査

7月・2次審査 公開ヒアリング審査
設計者選定

9月・第3回住民ワークショップ

10月・第4回住民ワークショップ

12月・第5回住民ワークショップ

2019年3月・新図書館愛称募集

3月・新図書館設計完了

5月・新図書館愛称候補作品選考

5月・新図書館建設工事入札

6月・新図書館愛称決定投票実施
愛称決定

6月・新図書館建設工事請負契約締結

6月・第6回住民ワークショップ

9月・第7回住民ワークショップ

2020年7月・第8回住民ワークショップ

11月・住民ボランティアによる引越し作業

11月・第9回住民ワークショップ

11月・28日 新図書館竣工式
29日 新図書館オープン



ちえの森

ちづづ図書館

ついに開館！



新型コロナウイルス感染拡大の影響で建設工事が遅れ、当初予定していた9月開館が11月に延びてしまったこともあり、町民のみなさんにとって待ち望んだ開館日となりました。

開館イベントは時間を短縮して屋外での開催になりましたが、とにかくみんなが開館をお祝いたいという思いがあり、当日は多くの人でにぎわいました。

コロナ対策によるさまざまな制限がありました。町民ボランティアの「ちえの森応援隊」のみなさんが検温や消毒の対応も手伝ってください、職員だけではとてもたいへんだった開館日をなんとか乗りきることができました。

いよいよ開館し、図書館のなかに入ると、みなどこか一ヶ所に集まるのではなく、それぞれが自分の居場所を見つけ、思い思いの時間を過ごしているのが印象的でした。これまでワークショップに参加し、図書館整備に携わってきた町民は、各々思い入れのある場所へ赴き、自分たちが話し合ってきたことがどのようにかたちになったのか確かめているようでした。

ワークショップに参加していた中学生グループも朝から図書館に集まって

いました。当時中学1年生だった生徒たちは、いまはもう高校2年生です。智頭町には高校が1校しかなく、ほとんどの生徒が中学校卒業後は町の外へ進学します。そのため中学生のときに一緒にワークショップに参加していたメンバーも、いまはばらばらの高校に通っており、この日は久しぶりの集合でした。こうして高校生たちが図書館に集まる姿は、まさにワークショップで思い描いていた光景でもあります。ちえの森ちづ図書館が開館して数ヶ月が経ち、図書館を利用する町民の様子を見ると、図書館が開館したその日から、町民のみなさんが「自分たちの図書館」として利用しているのがわかります。これまで積み重ねてきたワークショップが、図書館の建物を建てるためのワークショップではなく、町民の「こんなことしたい」という想いを実現するためのワークショップだったのだと、開館してみても気づきました。開館後、町民からも「またワークショップやらないの」と声をかけられることがあります。今後この場所できているのか、これからも町民と一緒に考え、つくり続けていくことが図書館だと思っています。

「智頭図書館を考える会」から

「ちえの森応援隊」へ

——自己紹介と、智頭町の図書館に関わるようになって経緯を教えてください。

徳永 「ちえの森応援隊」の代表を務めています。50歳半ばまでは法律関係の事務所に勤めていて、図書館に直接関係のある仕事をしていただけではありません。民生委員を務めており、智頭町の福祉等に関わりたいたい、そこから議会にも携わるようになりました。20年前、まだ図書室だった当時、図書館が欲しいという人たちが集まって「図書館を考える会」が有志で設立されました。立ち上げたメンバーの方と個人的なつながりがあり、声をかけられて、一緒にやることになりました。

——徳永さんにとって、その頃図書館はどのような存在でしたか。

徳永 当時勤め先の近くに県立図書館があったので、たまに利用していました。当時は本を借りるところぐらいにしか考えていませんでした。

——ワークショップに最初に参加したときの気持ちを教えてください。

徳永 中学生、高校生の若い人たちが元気だったのが印象に残っています。「こういう図書館が欲しい」という純粋な気持ちが伝わってきて、これは何とかせなげんか、という思いを強くもちました。

——大人のみなさんが、中学生の話を中心に聞いて話しやすいような環境づくりをしていたのではないかと感じます。特に意識されていたことはありますか。

徳永 智頭の場合は、以前の町長さんが、住民のみなさんの意見を取り入れようと「百人委員会」というのを始めました。その後、子どもたちの意見も取り入れられるように中学生や高校生が提案する部ができました。そのなかで、子どもたちの考えが行政に伝わったという経緯があり、これまでの積み重ねがあったと思います。

——ワークショップで印象に残っていることを教えてください。

徳永 みんなの思うことを用紙にいったい書き出して、それをお互い発表して、グループでまとめる、というやり方がよかったです。グループでまとめる、というお年寄りもみんなが意見を言う機会がありました。

——そうしたワークショップを経て、開館日を迎えたときにどのように感じましたか。

徳永 いちばん感動したのは、木質のあたたかさ。そしてワンフロアの広々とした奥行きが印象的で、こんなすてきな施設ができたんだ、という思いでした。図面を見ても想像はできましたが、実物を見るとイメージとはまったくちがってました。

——開館日に集まっている人たちの様子はどうでしたか。

徳永 普段図書館に縁がない人も結構いらしたと思うのですが、その方たちがどう思っているのか聞いてみたいなと思いました。子どもから年配の方まで年代関係なく多くの方がいらしたので、とてつよいな、と思いました。

——徳永さんの、図書館のおすすめのポイントを教えてください。

徳永 おすすめの本を紹介する「つながる本棚」のコーナーがあり、これがすごいなと思います。手に取ってみよう、読んでみようという気持ちになります。本を読んだ感想は人それぞれ違うと思うので、1ヶ所でも2ヶ所でも自分がいいなと思うところを見つけてればそれで十分だと思います。この本棚をきっかけに本を読んでみてほしいなと思いましたね。あとは司書さんの対応がとても丁寧で、みなさん好感をもたれているのではないかなと思います。

——新しい図書館ができたことで、智頭町がどのような町になっていくとよいと考えていますか？

徳永 図書館はたんに本を貸し借りするところではなく、町民がつかえる場所だと思っています。そこに行く自分の気持ちが落ち着く、そこに集まると町民の心がつながる場所ではないかと思っています。住民の方のなかにはいろんな考えの方がいると思いますが、長い目で見たときに、図書館ができてよかったな、と思っただけなのではないかと思っています。新しい図書館は人間でいえば産声を上げたばかりなので、これから育てていくのも住民の役割だと思います。できる範囲で、無理をしない範囲で、図書館の応援隊として頑張りたいです。

智頭図書館を考える会のこれまでをふりかえる

智頭
図書館を
考える会



調査として先進地の図書館を視察



バザーの売上を図書館へ寄付

「智頭図書館を考える会」は、平成12年に有志のメンバーで設立されました。智頭町に図書館をつくるために、議会への働きかけや先進地への視察等、さまざまな活動を行ってきました。こうした長年にわたる積み重ねが「ちえの森ちづ図書館」の開館につながっています。



応援隊のみなさんによる館内の清掃



応援隊のネームプレート

ちえの森
応援隊

図書館の開館以降、「智頭図書館を考える会」は図書館ボランティア「ちえの森応援隊」として清掃やイベントの企画等の活動を行っています。「智頭図書館を考える会」のメンバー11名ではじまった「ちえの森応援隊」は、開館後新たなメンバーが増え、いまは20名以上になります。自分たちでできることは自分たちでやる、という気持ちで活動をはじめ、まさに「わたしたちの図書館」として主体的に図書館の運営をサポートしています。



徳永英太郎さん(ちえの森応援隊代表)

新しい図書館は

人間でいえば

産声を上げたばかりなので

これから育てていくのも

住民の役割だと思います

住民ワークショップメンバー
インタビュー-02

下山雄士さん 長石玲子さん

——自己紹介と、ワークショップに参加することになったきっかけを教えてください。

下山 図書館からほど近いところにある木屋をやっています。図書館をつくるのは、おそらくこの先にはない、またたない機会だと思ひ、自分たちに必要なものを実現するための施設にしてほしいと思ひたので、参加しました。

長石 智頭町へ引越してきて10年になります。ワークショップは、下山さんに「こんなプロジェクトがあるんだけど、どう？面白いよ」と誘われて、いろいろな人に出会えるかもしれないと思ひて参加しました。「こんな夢を実現するなんて、すごい」と思ひましたし、「人の力は偉大だ」と感じました。

——お二人がワークショップに参加した最初の頃の気持ちを教えてください。

下山 最初は、場所も含めて決まっていなかったばかりで、何から話していいのか分からない部分がありました。それが、ワークショップでステップを踏んでいくなかで、少しずつほぐれてきたというか、道筋が見えてきたように変わっていったと思ひます。

長石 私は、普段子どもと接する機会がないので、最初はどうやって子どもたちに話しかけたらいいのか分からなくて困りましたが、子どもたちがいろいろな意見を言う様子を見て、「子どもって素晴らしいな。こうやって、年齢に関係なく話ができるのはいいな」と思ひました。

——ワークショップのなかで、何が変わったか、何が動いたか、と感じた瞬間はありましたか。

下山 設計者が決まって、最初の図面について話をしたときです。ワークショップでの話し合いのあと、レイアウトがガラッと変わって、次の図面が出てきたと思ひます。ちょうどあのときですね、「声が届いたな」と感じたのは。

長石 私は、建設地へ調査に出かけたときです。それがすごく楽しくて、普段出会うことができない人と話したこと、距離が縮まったと感じました。とても天気が悪

(左)下山雄士さん(ちえの森応援隊)、(右)長石玲子さん



半歩先の世界へ
導いてくれるような本を
図書館にはずっと置いてほしい

知りたいこと、思ったことを
自分で勉強する場所、
本当のちえの森の図書館になってほしい

——最後に、10年後の町民のみなさんに向けて、メッセージをいただきたいと思ひます。

下山 10年後とはいわず、明日からでもいいのですが、いま、さまざまな人たちが図書館に集まるようになってきています。そこから何かが始まればいいと思ひます。たとえば、いま、囲碁や将棋をやっているおじさんたちがいるのですが、そのなかに子どもが一人入ってくるのか、そういうことが起きてくれればいいと思ひます。時間が経って、こうしたことがもつと自然に、いろいろな方向に広がっていきばいいと思ひます。そうすれば、それがまちにも影響を与えるのではないかと、そんな期待ももっています。

長石 ここは「ちえの森ちづ図書館」という名前なので、知りたいこと、思ったことを自分で勉強する場所、本当のちえの森の図書館になってほしいですね。結局、自分で考えないと、知識は身につけませんから。図書館が、そういういったときの人々の支えになってほしいですね。

住民ワークショップメンバー
インタビュー-01

西尾和彦さん 國岡千春さん

國岡千春さん(ちえの森応援隊)



図書館に来ることで
元気になれるような、
そんな図書館の活用をしたい

——智頭町の図書館と関わるきっかけについてお聞きしたいと思ひます。

國岡 私は、20年以上まえから智頭町に図書館がないのが不思議で、新しい町長が就任するたびに図書館の設置を訴えてきましたが、貸本屋程度にしか思ひていただけず、なかなか理解が得られませんでした。それがあるときから、図書館がまちづくりに役立つとか、居場所になるといった世の中の流れになってきました。ちょうどそのころから智頭町でも図書館づくりがぐんぐん進んでいきました。

西尾 私は当時、智頭町財産区議会の代表をしていました。ともあり、智頭町図書館づくり検討委員会のメンバーとして打診がありました。元々は図書館に縁がなく、学生のときに待ち合わせ場所として使ひていたくらいでした。だからこそ、自分のような人間がどうしたら図書館を利用するようにするか、という視点で取り組んできました。

——ワークショップのなかで、特に印象に残るやり取りはありますか。

西尾 私は各グループの報告のなかで、自分が勤務している智頭急行ブースの話が出て、寸劇を交えて楽しくグループで発表したことが印象に残っています。

國岡 中学生の意見が発達したのですが、「子どもが中心になるばかりではなく、これからは老年期に向かう私たちの居場所も図書館には必要ではないか」と私が言ったときに、徳岡設計の藤城さん(新図書館の設計を担当

18・19ページ参照)が賛成してくださったのがうれしかったですね。

——ワークショップに中学生たちが参加していた意義についてお聞きしたいと思ひます。

西尾 中学校にも図書館はありませんが、卒業後も図書館を利用できる環境をつくれたことはよかったですと思ひます。大人になっても図書館を利用したり、子どもと一緒に来たり、今後も利用し続けてもらえるといいと思ひています。

國岡 私の経験から、中学生のときがいちばん、読んだ本や、知識、情報、人についての印象が大きく残る時期だと思ひています。大人になる一つまえの段階の世代の人たちが、熱心に参加されたのは、郷土への愛情や図書館に対する思いがあるからだと思います。将来、彼らがちえの森ちづ図書館を支えてくれる人材になるだろうといううれしさがありました。

——実際に新しい図書館に来館したときの気持ちはいかがでしたか。

西尾 「智頭急行コーナーが本当にできたんだ」という思いと、「今後、これを活用しながら、にぎやかに鉄道関係のこともしていきたい」という思いが出てきました。

國岡 新しい図書館に足を踏み入れたときは、長年想像していた以上に美しい空間で、胸がいっぱいになりました。寄贈した石を見たとき、石がこれからも残るのであるというところが、「私が智頭で生きてきた証が、大好きな図書館とともにあるんだ」とうれしく思ひました。



西尾和彦さん(智頭町図書館づくり検討委員(当時))

今後、これを活用しながら、
にぎやかに鉄道の関係等のことも
しなくてはいけない

——図書館のおすすめの場所を教えてください。

西尾 智頭急行コーナーは、椅子の感触を確かめながら座って、智頭急行が通る智頭駅のほうを見ていただきたいですね。智頭急行の鉄カードやカレンダー等、いろいろ置いてあります。とにかく智頭急行に興味をもっていただけたらうれしいですね。

國岡 私は、図書館全部です。本棚を見ても、いままでと同じ本があるとは思いません。本の表紙を見せて並べると、本が生き生きとして、本のほうから「私を手を取って」と言っているように感じて、つい本を手を取ってしまいます。児童図書コーナーでは親子で遊んだり、つどいの部屋では囲碁をされていたり、いままでまったく図書館に來れなかった方が来ています。

——最後に、これからの図書館に期待することを教えてください。

西尾 よい図書館ができましたが、できたから終わりではなく、図書館をどうしていくかが今後の課題です。まずは自分も少しずつ関わり合ひて、自分のような人をどう巻き込んでいけるかということ、みなさんと考えたいといけません。私も、できる限り協力していきたいと思ひます。

國岡 私も高齢ですが、智頭町は谷に住んでいる高齢者が多いので、そういった方々にも図書館に足を運んでもらえる手段や、楽しめるイベントが増えて、図書館が身近になるといいと思ひます。困りごとやストレスを抱えていても、図書館に來ることで元気になれるような、そんな図書館の活用をしたいと考えています。

——新図書館ができたことで、本と人々の暮らしの関係が、どうなっていくと思ひますか。

下山 自分の店でもそうですが、図書館にはいま欲しい本ではなくて、半歩先の本を置いてほしいと思ひます。少し先に、こうあってほしいという世界があると思ひます。ちょっと引つかかかって本を見たら、それがその先の自分の行動を決めたり、方向づけを少しだけ手伝うとか、半歩先の世界へ導いてくれるような本を図書館にはずっと置いてほしいと思ひます。

長石 私は、敷地に桜が残ったことが本当によかったと思ひています。「4月になったら桜が咲いて、いいだろうな」とこだわりました。桜がランドマークになっていくのではないかと思ひます。

——新図書館ができたことで、本と人々の暮らしの関係が、どうなっていくと思ひますか。

下山 自分の店でもそうですが、図書館にはいま欲しい本ではなくて、半歩先の本を置いてほしいと思ひます。少し先に、こうあってほしいという世界があると思ひます。ちょっと引つかかかって本を見たら、それがその先の自分の行動を決めたり、方向づけを少しだけ手伝うとか、半歩先の世界へ導いてくれるような本を図書館にはずっと置いてほしいと思ひます。

長石 私は、敷地に桜が残ったことが本当によかったと思ひています。「4月になったら桜が咲いて、いいだろうな」とこだわりました。桜がランドマークになっていくのではないかと思ひます。



自分一人ではなく、
まちに人の営みの歴史があることも尊重しながら、
この図書館を育てていかなければいけない

—自己紹介をお願いします。
大藤 今年94歳になります。これまでいろんな仕事をしてきました。小学校の代用教員、役場の職員、農協の組合長もやり、辞めてからは家業の山の仕事をしています。70歳を過ぎて、自分でチェーンソーを使って間伐をしていました。とにかくいろんなことを経験しました。
—いつごろから図書館を利用していましたか。
大藤 はっきり記憶にないですね。20年以上前、まだ図書室だったときから利用していたと思います。子どもの頃から本が好きでしたが、いまいばん関心が高いのは、

時代時代の情勢について。それと歴史ものです。ワークショップに参加するきっかけを教えてください。
大藤 旧図書館によく通っていて、そのときカウンターにあったワークショップのチラシを見て参加しました。1回だけ病院に入院して欠席しましたが、それ以外は皆勤賞でした。
—ワークショップにはいろんな世代がいましたが、若い世代と一緒にやるのはどうでしたか。
大藤 こういう若い人が智頭町の将来を背負ってくれるのだと感じて、頼もしく思っていました。

—ワークショップで思い出に残っているのはどんなことですか。
大藤 若い人がかなりいい発言をしていたな、という印象があります。自分のことについては、とにかく書くことが難しくなったなと感じました。思っていることがあっても、書くとなると書けない。日記を毎日書いていますが、書くということが難儀になりました。
—そういうなかでも、大藤さんはきちんとご自身の言葉でお話しして、まわりの人と一緒になってワークショップに取り組んでくださっていたと思います。新しい図書館が開館したときはどう思いましたか。
大藤 すごいなあと思いました。立派なものがあったなあ、これを活かしていかなければいけません、という責任感といいますか。なんとかしてこれを育てていかなきゃいけないと痛切に感じました。
—開館後はどれぐらいのペースで図書館に行かれていますか。
大藤 体がなかなか動かなくなってきたので、おそらく2週間に1回ぐらいだと思います。去年までは畑も自分でやっておりましたが、今年からは体力的にも限界だと思えます。畑仕事はもう厳しいと思いますので、これからは図書館に毎日でも通って、若い人とのつき合いもしたいです。年寄りの人の困りごとの相談にもつてあげたいなと思っています。
—最後に、まちなみなさんに、図書館に関して伝えたいことはありますか。
大藤 この図書館の愛称を考えたのが小学生でしたが、「ちえの森ちづ図書館」という名前なので、知恵の源泉は図書館にあるんだ、と伝えたいです。いろんな知識を吸収できる図書館をおおいに利用して、智頭町の発展につなげていただきたいです。これまでの人の営みがずっと続いてきていまの智頭町があります。自分一人ではなく、まちに人の営みの歴史があることも尊重しながら、この図書館を育てていかなければいけないと感じています。



これだけ多くの方が図書館に関心があり、ボランティア精神ももっているのがうれしかったです、ほっとしました。

—図書館協議会に入られた経緯を教えてください。
山中 当時、月2回ほど図書館を利用しており、利用者の一人としてお誘いいただきました。当時の図書館は倉庫のような暗い印象があり、図書館の存在を知っている人は少ないと思っていたので、「図書館に関わるのもいいな」と思い、引き受けることにしました。
—ワークショップに参加されたときはどのように感じられましたか。
山中 はじめはワークショップという言葉も知らなかったのですが、参加してみると中学生もいたりして、みんな活発に発言していたので、「若い人たちが頼もしいな」と感じました。
—ワークショップで特に印象に残っているのは、急遽寸劇で発表することになり、司書役を演じたことですね。あとは恥ずかしそうにしていた若い人たちも、いい考え、前向きな考え方をもっているの、彼ら、彼女らにずっと注目していました。
—以前の図書館では「もっとこうだったらいいな」という思いがあったのでしょうか。
山中 以前の図書館は、こじんまりしていて、いちいち書庫に本を探しに行かなければなりません。図書館は住民の100%が歓迎するものではないかもしれませんが、若い人を育てるためには、図書館がきちんと整っていないと、まちの発展はないと思っていました。まわりの人たちは、「図書館なんか何の役に立つの?」なんて言われることもありましたが、そのときには、「若い人を育てなければいけないし、若い人に残さなくてはいけないから」と話していました。
—開館日に新しい図書館に入ってみて、どのような気持ちになりましたか。
山中 「やっとできた」という、ほっとした感じでした。明るい気持ちですね。開館日には、近所の家族連れ等、図書館に初めて来たような人たちもいて、「図書館に来たことがない人たちも来るんだ」とうれしかったです。ま



山中章太郎さん(図書館協議会委員長)

た、開館前の図書館の引越し作業に、ボランティアとして170人も人が来てくれたことにびっくりしました。僕の予想は、その半分以下だったんですよ。これだけ多くの人が図書館に関心があり、ボランティア精神ももっているのがうれしかったですし、ほっとしました。
—図書館のことを大事に思い、行動もされていますが、何が山中さんを動かしているのでしょうか。
山中 僕自身は、それほど熱意をもって貢献しているわけではありません。図書館の庭木の手入れはほかの人に任せたくないと思うだけです。僕は昔から図書館が欲しいと思っていました。会社勤めのときも、自衛隊にいたときも、身近に図書館がありました。この図書館も暗かったですね。よい図書館というものは個人ではつくることができないので、まちで図書館をつくらせたいと思ったが、ここは自分の図書館のようなものです。
—今後図書館はどうつき合っていきたいと思っていますか。
山中 それはいままでと一緒にです。僕は利用者の代表ですから、協議会の委員長を降りても、本を読む体力がある限りは図書館を利用させてもらいたいと思っています。利用者を増やすために僕ができることは、まわりの人に「図書館に行ってみれば?」と言うくらいしか方法がありませんが、これからはずっと図書館のお世話になると思っています。

中学生メンバー(当時)へのインタビューと活動の記録



知識を広げるために
図書館を使って欲しいです

— ワークショップに初めて参加したときに感じたことをおうかがいしたいと思います。
しゅんくん(熊谷駿介さん) 参加するまえはそんな人が集まらないと思っていました。ですが、智頭町のためにたくさんの方が集まっています、すごいと思いました。僕は人見知りなので、緊張していました。

いるように感じました。初めて参加したときに全体での発表をまかされたのですが、それで「次も出てみよう」という気持ちになりました。
ひなたさん(小坂日向さん) 私もとても緊張していました。まわりが大人だけという環境が高かったです。その後ワークショップのなかで、外に出てみんなでまち歩きをしたこと

で、リラックスできるようにになりました。
— ワークショップのなかで「智頭町らしい」という言葉が出てきたかと思いますが、みなさんにとっての「智頭町らしさ」とは何ですか。
りちかくん 僕は生まれたときから智頭町に住んでいて、高校から鳥取市に行ってきたことですが、いい意味でも悪い意味でも、人間関係が深いように思います。たとえば、近所の人に「部活、何している？」と聞かれたりします。鳥取市の子に聞いたら、「そんな会話、あるわけないじゃん！」と言われました。そんな一体感が「智頭町らしさ」かな、って思います。
さつきさん(武田咲月さん) 智頭町は人の距離感が近くて、すれ違う人はだいたい知っているの、その分、困っているときに助けてくれる人がいっぱいいるように思います。そのつながりが、智頭町らしいところだと思います。
しゅんくん 7月に僕のおばあさんが亡くなったのですが、そのときにまわりの人たちが心配してくれて、お葬式の時にも知り合いの人がたくさん来てくれて、「智頭町は人が温かい」とあらためて思いました。

さつきさん 私が印象的だったのは、中学生が「ティンズコーナーや学習スペースが狭いので、もっと広い場所が欲しい」と言ったから本当に広がったことです。言ったことを実際にかなえてもらったので、うれしかったです。
りちかくん 智頭急行コーナーに思い入れがあります。以前職場体験に行つて、廃車になった車両の椅子が余っているのを見つけたので、車両の椅子を使うことを提案しました。自分の意見がそこに反映されているの、思い入れが強いです。
ひなたさん 私はやはり、図書館の広さですね。まち歩きで候補地を何ヶ所か見て回つて、いちばん広い場所がここでした。私は職場体験で図書館の司書をやったときに、図書館に入りきらないほどの本がほかの部屋にも置いてあって、もったいないと思っていました。「広い図書館で、いろいろな本を見ることができたらいいな」と思い、いちばん広いここをみんなで選びました。
— 当時中学生だったみなさんが、ワークショップのなかで大人に対して感じたことはありますか。
さつきさん 私は「熱いな。よくしゃべるな」と感じ、それだけ図書館にかける思いがあるのだろうなと思っていました。
りちかくん 役場の人とか、よく知っている大人が結構いたけど、普段の姿しか知らないの、普通のおじさんだった人が、まじめに討論をしたり仕事をしていたりする姿を見て、イメージが変わりました。
しゅんくん 僕がいたグループには、話をまとめる人、プレゼンをする人、イラストを描

く人とか、いろいろな人がいました。智頭町には7,000人くらいの住民がいますが、そのなかからすごい人たちが集まったんだな、と思いました。
— ワークショップのときの「中学校を卒業してみんながバラバラになっても、図書館が集まる場所になればいいな」という思いは実際に実現できていますか?
さつきさん 私はいま、鳥取市に住んでいて、鳥取市の高校に通っているの、智頭町にも図書館にもほとんど行くことがありません。でも高校で、時々智頭町の図書館の話が出ます。鳥取市の子から「智頭の図書館、大きいんでしょ？」みたいな話が出て図書館のことは、よく話します。

初は先生に言われて参加したのですが、だんだん興味が出てきました。最初はちょっとでも気になったら、友だちを誘って、とりあえず参加してみるとよいと思います。元々は小説ばかり読んでいたのですが、図書館を使うことで、ちょっと難しい新書なども読んでみようと思つたので、いろいろなことを知るための図書館だと思います。ただ小説を読むだけではなく、知識を広げるために図書館を使ってほしいですね。図書館では勉強をしてもいいし、小説を読んでもいいし、中学生が集まっておしゃべりしてもいいと伝えたいです。

す。
ひなたさん 今年高校で、あるイベントを企画し実行したなかで私が思ったことです。最初はあまり話したこともない人たちが始まり、プロジェクトのなかで話をするうちに、つながりができたり、完成したときに達成感を感じたり、図書館のワークショップと同じだと思えました。何かを本気でやるということはとても大事で、これを読む未来の中学生にも、誰かと関わることや何かをつくりあげることの楽しさや達成感を知ってほしいと思います。さつきさん 私たちの世代は、この図書館が

できあがるまでゼロから関わってきたので、「私たちの図書館」という意識があるのですが、すでに図書館がある状態で育つ子どもたちにとっても「私たちの図書館」という意識をもってもらい、本を読むもよし、勉強するもよし、話すもよし、みたいな感じで、図書館をたくさん使って愛してほしいと思います。しゅんくん 待ち合わせでもいいし、小さいことでも図書館を利用してほしいと思います。目的がなくてもふらっと行つたり、学校帰りにちょっと寄りつたりするのもいいので、ぜひ図書館に来てください。

りちかくん ワークショップのときは、「たまに図書館で出会う」ことを想像してました。最近、智頭町の子たちがテスト期間中に、図書館に行つて集まるという話をよく聞くので、それは自分が思っていたことと近いように思います。それと、僕が図書館のティンズコーナーに行つたときに、ちょうど中学3年生が受験勉強中で、「勉強を教える」という感じになり、当時は考えていなかった図書館の使い方もあるなと思いました。
しゅんくん 僕が待ち合わせのために図書館に行つたときに、たまたまりちかくんや中学生が勉強をされていて、偶然人が集まる場所になるんだな、と思いました。
— 10年後の智頭町の中学生、まちのみなさんへのメッセージをおうかがいしたいと思います。
りちかくん 僕は、ワークショップに参加したことが自分の進路にも影響しています。最

中学生グループワークメンバー(当時)



本を読むもよし、
勉強するもよし、
話すもよし



図書館をたくさん使って
愛して欲しいと思います

(左から)小坂日向さん、
加賀田理元さん、
武田咲月さん、熊谷駿介さん



みんなで考える 「私たちの新しい図書館」 住民ワークショップのプロセス



新図書館建設事業を進めるプロセスとして、「みんなで考える私たちの新しい図書館」と題した住民ワークショップを全部で9回開催しました。ワークショップを通じて共創（ともに考え、ともに創ること）を体験することで、新しい図書館が「私たちの場所」であるという意識を共有することができました。このワークショップから生まれた場所や機能のアイデアは、新図書館の中でさまざまなかたちで実現しています。こうした積み重ねが、開館後の運営にもつながり、「私たちの新しい図書館」は、住民のみなさんと図書館の協働によって日々進化を続けています。

第1回ワークショップ 2017年8月5日(土)
「まち歩きと建設候補地から考える新しい図書館」
みんなでまち歩きを行い(建設候補地とまちなか)、智頭町の魅力と課題を再発見し、地図を作成しました。

第2回ワークショップ 2017年12月3日(日)
「新しい図書館の利用ストーリーを考える」
まち歩きで再発見したこと、基本構想案の「図書館のありたい姿」をふまえて、新しい図書館の利用ストーリーを創作しました。

第3回ワークショップ 2018年9月17日(月・祝)
「まち歩きの地図と利用ストーリーから考える新図書館の可能性」
プロポーザルで選定された設計事務所のメンバーも加わり、地図とストーリーから考える新しい図書館の可能性を検討しました。

第4回ワークショップ 2018年10月8日(月・祝)
「新図書館の設計図は智頭図書館のありたい姿になっているのかを考える」
設計事務所から提案された新しい図書館の設計図について、みんなで検証し、これまでのワークショップをふまえた「智頭図書館のありたい姿」になっているのかを検討しました。

第5回ワークショップ 2018年12月2日(日)
「新図書館の設計図を利用者、運営側、まちとのつながりから考える」
前回を受けて設計事務所から再提案された設計図をもとに、図書館利用における行動や感情のつながりから新しい図書館の可能性をあらためて考えました。

第6回ワークショップ 2019年6月30日(日)
「完成した設計図をもとに図書館の具体的な利用について話し合う」
完成した設計図について設計事務所から説明を受け、設計図から、図書館の利用を1週間のスケジュールで考えました。

第7回ワークショップ 2019年9月16日(月・祝)
「建設地で確認する図書館の具体的なサービス」
新しい図書館の愛称「ちえの森ちづ図書館」を考えたい二人の愛称に込めた思いを紹介しました。また、建設地に原寸の図面を制作し、これまで考えてきたストーリーを想像しながら、体験のシミュレーションを行いました。

第8回ワークショップ 2020年7月12日(日)
「新図書館のオープニングイベントを考える」
新型コロナウイルス感染拡大防止のため十分な対策を取った上での開催となりました。ワークショップ参加者によってデザインされた図書館のロゴマークを紹介し、オープニングイベントの内容を検討しました。

第9回ワークショップ 2020年11月22日(日)
「みんなで考える『私たちの新しい図書館』」
みんなで完成した新しい図書館へ行き「私たちの新しい図書館」について、語り合いました。



智頭中学校新図書館プロジェクトのあゆみ

智頭中学校の生徒たちが、新しくできる図書館について「こんな図書館があったらいいな」「図書館でこんなことができたらいいな」と中学生の視点で考え、かたちにしてみました。学校での総合的学習の時間を中心に、住民ワークショップにも参加し、地域の方々とともに作りあげていきました。

2017年度

新しくできる図書館について、「こんな図書館があったらいいな」と班ごとに考えて意見をまとめ、第1回住民ワークショップで発表しました。



新智頭図書館整備基本構想(案)を読み、パブリックコメントに意見を提出しました。また、「新しい図書館でこんなことができたらいいな」というストーリーを考えました。



第2回住民ワークショップでの「新しい図書館のストーリー」を冊子にまとめる作業に参加しました。



百人委員会(住民が町の事業を提案)で、町執行部へ提案する新図書館づくり事業(案)を、班ごとに企画しました。

2018年度



町執行部からの意見をもとに、企画提案を見直し新図書館プロジェクトの準備を進めました。また、藍染め工房「ちづぶるー」へ行き、藍染めについて学びました。



設計者へ新図書館づくり事業(案)を班ごとに提案しました。新図書館プロジェクトとして「新図書館PR&開館記念しおり製作」を決定し、百人委員会で新図書館プロジェクト事業を町執行部へ提案しました。

2019年度



「藍染めひも付き杉しおり」を地域の方に協力してもらい製作しました。また、百人委員会で新図書館プロジェクト事業を町執行部へ実施報告し、町長へ成果品の引き渡しを行いました。



杉しおりデザインと、しおりに付けるメッセージカードを企画し、杉しおりについて、山形地区振興協議会の方からお話をうかがいました。

みんなで考える 「私たちの新しい図書館」

住民ワークショップのプロセス
〈ダイジェスト〉

ファシリテーターの紹介

住民ワークショップ「みんなで考える私たちの新しい図書館」を進めるにあたっては、アカデミック・リソース・ガイド(arg)の岡本真さんと李明喜さんにファシリテーターをお願いし、町民や職員のサポートをしていただきました。アカデミック・リソース・ガイド(arg)は、全国で図書館を中心とした公共施設整備の支援を行っています。こうしたさまざまな地域での経験を活かし、智頭町らしい協働のプロセスを、町民のみなさんとともに実践していきました。



「ワークショップを通じて中学生のみなさんが成長していく姿が頼もしかったです。そんな中学生を大人が支えたり、町民と職員が一体となって進んだり、素晴らしい協働でした。」(李明喜さん)

「世代を超えて視線をあわせて語らう姿には心底感動し、私にとってもかけがえのない経験になりました。智頭のみなさんからまなんだことを私も実践していくよう励みます。」(岡本真さん)



これまでのワークショップで作成したワークシートの記録



記念すべき第1回住民ワークショップでは、猛暑のなかまち歩きを実施しました。地図をみんなでしっかり見て予習をしたこと、そして、みんなで話しながらまわったことで、地元で暮らしているとついつい見落としてしまうさまざまな日常の風景を再発見することができました。特にシニアのみなさんの話に真剣に耳を傾ける中学生の姿が印象的でした。

第4回は、最新版の設計案が「新しい智頭図書館のありたい姿」になっているのかについて、とことん対話し、検証する回でした。最初に設計者からの意図を丁寧に説明してもらい、それを受けて各グループで活発な議論が展開されました。この日の対話と創造によって、設計のイメージと利用のイメージがついにつながりはじめました。振り返ると、この回が大きく前に進む転機になったと思います。



第8回は、新型コロナウイルス感染拡大の状況下での開催となりました。ファシリテーターや設計者など町外在住者はオンラインでの参加となり、会場においても参加者同士が対面にならないよう配置するなど十分な対策を講じて実施されました。当初は不慣れた環境への不安もありましたが、町民を中心としたこのチームには関係ありませんでした。住民ワークショップで積み重ねてきた共創の精神は今後の図書館運営にも活かされていくでしょう。

建築 の紹介

徳岡設計 インタビュー

—自己紹介と役割について教えてください。

藤城 徳岡設計取締役副社長の藤城義丈です。今回はプロポーザルで選定され、智頭町の新図書館設計に取り組むことになりました。

中島 徳岡設計の中島慎一です。意匠担当としてプロジェクトに携わることになりました。私は自身が図書館の設計が初めてだったので、みなさんにいろいろと教えてもらいながら取り組んできました。

—設計プロポーザルに応募したきっかけを教えてください。

中島 図書館設計に取り組みたいと思っているなかでこのプロポーザルの情報を見つけました。要項にはワークショップをやるのが条件として書かれてあり、地域や住民と関わりながら設計を進めることにも関心があったためこのプロポーザルへの参加を決めました。



藤城義丈さん(徳岡設計)

藤城 私は自身は、これまでさまざまなワークショップに参画させていただき、住民のみなさんが関わったことによりまちが変化していくような図書館づくりも経験してきました。そういう意味では、ワークショップをやることにまったく違和感はありませんでした。

—町民のみなさんとのコミュニケーションで気をつけていたことはありますか？

藤城 私たちは、自分たちのやりたいことを言うのではなく、何を求められているのかを拾い出したい、と思っていました。町民のみなさんがどう使いたいかを引き出せるように気をつけていました。中島 こちらからは、こういう使い方をしてください、といったような話はしませんでした。同じ図書館づくりをしてい

図書館によってまちが変わっていき、
よりよいものになっていくのを
楽しみにしています。



原っぱ越しの夕景 智頭町の屋根トラスと図書館内部の様子が浮かび上がります

まずは図書館を訪れてみてください！
利用者がどんどん広がっていくことで
図書館は進化していくと思います。

—町民のみなさんへメッセージをお願いします。

中島 どんどん使ってください！一人ひとりの「こうしたい」とか「ああしたい」といったことが図書館を通して実現していく、そういう姿を見ていきたいです。図書館によってまちが変わっていき、よりよいものになっていくのを楽しみにしています。

藤城 ワークショップに参加していない人や図書館を利用したことがない人も、ぜひ一度図書館に来ていただきたいと思っています。図書館にはみなさんを迎えてくれる人々、司書さんたち、まちの人々が見えます。そこにきつと自分の居場所が見つかるはずです。まずは図書館を訪れてみてください！利用者がどんどん広がっていくことで図書館は進化していくと思います。



中島慎一さん(徳岡設計)

る仲間として参加していました。

藤城 スケジュールが厳しいなか、ワークショップの運営についてはaribさんが担当してくれたので、私たちは設計に専念することができました。なので、みなさんの意見を設計でかたちにしてい



基礎工事が完了し、建物の形状がはっきりしてきました



鉄骨建方完了し、智頭町の屋根トラスを設置しました



屋根工事中、建物全体のボリュームが見えてきました



工事完成、桜の紅葉が美しくまちに溶け込んだ景観となりました

建設に携わった方からメッセージ

新型コロナウイルス感染拡大や全国的な資材不足により工期を延長するなど心配なこともありましたが、屋根トラスを智頭形で組むなど智頭町にあったように工事を進めていくことができました。施工でいろいろとたいへんなこともありましたが、こういう建物ができて憩いの場としてみなさんに利用してもらえると嬉しいです。



山根英久さん
(株式会社ジューケン)



芦谷義人さん
(株式会社原田建設)

ロゴサイン の紹介

村岡姉妹 インタビュー

—ワークショップに参加したきっかけを教えてください。

明日香さん(姉) 高校のときにお世話になった司書の上田さんに声をかけてもらいました。私たち二人が家にこもりがちなので、外に出るきっかけとして「ワークショップに出てみないか」と言われて、第1回から参加させてもらいました。

—第1回目に参加したときの気持ちを教えてください。

明日香さん 同じグループに下山書店の下山さんがいたので、「お話ができる人がいる」と、ちょっと安心しました。千里さん(妹) 人見知りなので、見ず知らずの人ばかりではなく、知っている人がいるという意味で、少し楽でしたね。—ワークショップでお二人が描いた絵が印象的でした。描かれたのは自然な流れだったのでしょか。

明日香さん 文字に起こすのが苦手で、



(左)村岡明日香さん (右)村岡千里さん

話すのも苦手なので、挿絵のような感じで伝わりやすいと思って描きました。「用紙を埋めることができなかったので絵を描いてしまおう。真っ白よりはいいかな」という感じでした。

千里さん にぎやかし程度の気持ちでした。

—その絵がきっかけでグラフィックデザインをお二人にお願いしよう、ということになりました。そのことを聞いたときはどう思いましたか。

千里さん 「ワークショップの参加人数の足しになるかな」くらいに思って参加していたので、「こんなことになるとは!」とびっくりしました。

明日香さん 絵を描いたら、それがつなげて、お話をもらって、思ってもみな

かった展開でした。

—デザインを仕事として進めるなかで苦勞したことは何でしょうか。

明日香さん こういう仕事の経験が初めてだったので、画像の変換とか、そういう細かなことを含め慣れないことが多くて、疲れましたね。

千里さん 私の場合は、たいへんだった

二人でデザインするなかで、

お互いに曲げられない部分で

ぶつかったことはたくさんあります。

ワークショップに出たことで、自分がやってきた絵を描くということからつながりが生まれました。



2人がデザインした「ちづちょうマップ」はみんなが書き込めるようになっている

のはちづちょうマップですね。自分自身が狭い範囲でしか生活をしていないので、智頭町はこんなにも大きいんだと思いましたが、何を描くか描かないか、情報の取舍の判断をしました。初めてのことでわからないことがいっぱいありました。

—自分たちがデザインしたものをどう感じましたか。

千里さん 「これからマップを使ってもらえるのかな?」と漠然と思っただけで、まだ実感がなかったら、まだ実感がなにかもありません。

明日香さん 「本当に、自分たちがつくったのかな?」という感じですが、でも、「そうだな、つくったな」という感じもあります。反応を見るのが怖くて、あまり図書館に近寄らなかったというのもありました。



ニホンモンガをモチーフにしたマーク

—このお仕事をしたことで、「描く」ということが変わりましたが。

千里さん 人に見せてもいいものだと思えるようになりました。家で黙々と描いているだけだったのが、大きいところで人に見てもらえたので、「これでいいんだ」と、少し自信がきました。

明日香さん 今回のデザインの話をもらったあとで、徳岡設計さんから別のデザインの仕事の話がきたので、動き出せるきっかけになったらいいと思っています。



ちえの森 ちづ図書館

図書館のロゴマーク

—最後に二人から伝えておきたいことはありますか。

千里さん 私は、デザインの話が来ていなかったら、ワークショップに出るのを途中でやめようと思っていました。ワークショップに出たことで、自分がやってきた絵を描くということからつながりが生まれました。ずっと逃げてばかりいましたが、外に出てみることも大事なかなと思えました。

明日香さん この仕事を通じてレベルアップすることができました。実は、二人でデザインするなかで、お互いに曲げられない部分でぶつかったことはたくさんあります。でも、智頭町の人たちが気に入るデザインができたと思えば、それによかったのだと思っています。

—お二人の物語を、しっかり伝えていきたいと思っています。素晴らしいデザインをありがとうございました。



館内案内マップ

ちえの森 ちづ図書館

新図書館の愛称に込めた
思いについて

藤原涼花さん



私は本が大好きです。本を読むとたくさんの知恵がつくので「ちえ」を名前に入れようと思い、智頭は森がたくさんあるので「ちえの森」にしました。自分の考えた名前の図書館に行くのは嬉しいです。

谷口智哉さん



図書館には知恵がいっぱいあり、智頭町には森も多いので「ちえの森」としました。森は「シン」とも読むので、新しい図書館の「シン」とかけました。色々な年代の人がたくさん来る図書館になると嬉しいです。

ちえの森ちづ図書館

〒689-1402 鳥取県八頭郡智頭町智頭2090番地1

TEL: 0858-75-4123 FAX: 0858-71-0036

開館時間: 午前9時30分~午後6時(土・日午後5時30分)

休館日: 毎週月曜日・祝日・毎月最終木曜日・年末年始・蔵書点検期間

発行 ちえの森ちづ図書館
企画・編集 アカデミック・リソース・ガイド株式会社(arg)
デザイン 株式会社ボイズ
写真 岩本誠 米井美由紀
協力 株式会社徳岡設計